戦　争　と　平　和

沼津市遺族会　宮島きぬえ

結婚から65年…勤労動員、結婚、夫の出征、子供の誕生、空襲、敗戦、焼け跡からの戦後復興、夫の戦死公報…夫の戦死の公報に涙を流すこともはばかられ、その後の亡き夫の両親と子供とのバラックでの耐乏生活。思えば、自分でもよく乗り越えて来たと思う苦労の連続の長い長い歳月。神のご加護で、88歳の米寿近くまで生かされたことの有難さに感謝しつつも、時に、波乱に富んだ越し方が、まるで昨日のように蘇る。

戦争が拡大しつつある昭和18年、東京の市ヶ谷駅のすぐ近くに住んでいた宮島の所へ嫁ぎ、夫は国民服、私はモンペ上下での質素な結婚式を挙げた。当時、宮島は中支（中国の華中）から復員してきたばかりで、昼は仕事、夜は皇居の警備に忙しく、22歳になったばかりの私は勤労奉仕の毎日で、毎日の空襲警報に家の縁の下に防空壕を掘り、夜、寝るときはモンペ姿の毎晩だった。春も半ば過ぎの桜満開の頃、突然主人に来た召集令状…。覚悟はしていたものの3ケ月の身重、呆然としていた私に「せめて子供の顔を見てから出征したい。」元気のない夫の声に私は返す言葉もなく（お国のために頑張って働いてください。でも、必ず無事に帰って来てください。両親と子供が待っています。）と心の中で叫んだ。出征に際し、夫が私に渡してくれた頭髪と爪、私も髪の毛を切り、リボンを渡しながら握り合った手と手…。だが、これが最後の別れになろうとは夢にも思わなかった。

その後、手紙も来ないので心配していたら、「軍用列車からペンに紙を巻いて投げた兵隊さんがいる。」と届けてくれたその手紙に、「宮島國雄、ただいま出発します。」と走り書きがあった。

一週間後、門司港の旅館より内地へ帰る人に頼んだという手紙が届いた。「長い別れになるが、お前がいるから安心して戦地へ行かれる。自分は幸福者だ。短い間だったが、自分によく尽くしてくれて有難う。自分はもう生きては帰らない。勝つまでは戦って戦って身の滅ぶまで…。子供のことは頼む。男の子は強く、女の子は優しく、自分の分までお願いします。出征する時まで随分わがままを言った。今、悪かったと思う。出発の時、元気がなかったけど、これからの銃後の妻は気持ちを強く持ち、生きていってくれ。また、子供には中等教育を受けさせてくれ。両親のこと、くれぐれも頼む。時計も止まってしまったので一緒に送る。返事をくれるなら、至急速達で旅館まで送ってくれ。自分のことは心配しないでくれ。　　昭和19年8月3日　3時」

内地の生活はますます苦しくなり、特に食糧事情は緊迫し、水のような雑炊の日が続き、お隣の奥さんが窓越しにさつまいもを二切れくださった時のうれ

しさと、あの美味しかった味は、65 年たった今でも忘れることはできない。

昭和 19 年、大東亜戦争も日に日に激しさを増し、東京の空を銀翼をつらねた敵機襲来。不気味なサイレンと空襲警報の発令。夜は真っ赤に染まった四方の空を震えながら見つめる毎日だった。

昭和 19 年 11 月 13 日、病院で男児誕生、赤子の大きな泣き声に両親は大喜び。その時、夫がいてくれたらどんなに喜んだろうと真っ先にそのことを思った。翌日、またしても空襲警報に、湯たんぽとおしめを抱え、赤ちゃんをしっかりと抱きかかえ地下室へ避難し、それからは、連日の空襲に怯えながら母乳も出なくなり、赤ちゃんのためにもと、思い切って舅の実家の長野県飯田市へ疎開することになった。ちょうどその頃、戦地から夫の航空便が届いた。

「長らくご無沙汰しました。ご両親様、子供、おまえも変わりありませんか。自分も相変わらず軍務いたしております故、ご安心ください。毎日うだる暑さをもろともせず、半裸になり、昼と言わず夜と言わず、血の出るような苦労を一人一人が味わっている。新聞、ラジオで聞いたと思うが、陸海軍の荒鷲が、帰りのガソリンも積まないで、一機一艦、この意気、死生を超越し尽忠報国の精神を目の前に見た。何と言ってよいか書き表せない。日本ならこそ実に有難いと思います。お前も母親として、温かい心、誠心をもって自分の分までお願いします。手紙も思うように書けません。子供の生まれた日、男か女か、名前など知らせてください。

比島派遣一八四五部隊林隊　宮島國雄（検閲印）」

早速、航空便にて、男の子が生まれ伸明と命名したことを伝えたが、見たかどうかはわからずじまい。半月後、両親も家を焼かれ、着の身着のままで私達のところへ疎開して来た。お互い無事を喜び、手を取り合って喜び合った。それから信州市田村の役場の屋根裏に四人で住み始めた。ところが、食糧難はどこも同じで、さつまいもやかぼちゃの代用食で手足は黄色くなり、皮膚病に悩まされる毎日だった。伸明が一歳のお誕生日の頃、頭に牛乳をかぶり、火傷をした。油一升を持って医者に行き、薬を作ってもらい何とか生命を助けてもらったが、その間中、夫の手紙を読んでどんなに励まされたことか。

8 月 15 日、日本は敗戦・終戦の日を迎えたが、今日は帰るか、明日は帰るかと待ちわびた夫は復員して来ず、来たのは戦死の公報…。「昭和 20 年 3 月 15 日、マニラ、ルソン島に於いて戦死」私は只、呆然として涙も出なく、これから先どうして生きていこうか、夢も希望もなくなり、無心に遊ぶ我が子の姿に胸が一杯になった。ちょうどその頃、実家の兄もコレヒドール島で戦死。母の悲しみはひとしおで、気も狂わんばかりだった。夫も兄も戦死、頼る人とてなく、将来の見えない不安に胸がつぶれそうだった。飯田市へ遺骨を取りに行っ

た日、天竜川とアルプス連山の赤く染まった夕日が印象的で、今でも脳裏に焼き付いている。家に帰り白木の箱を開くと、「宮島國雄 27 歳」としか書かれていない紙が一枚淋しそうに入っていた。私は、夫が征く前に遺していった遺髪と爪を墓地に納めた。

昭和 25 年春、市田村の人々と名残を惜しみ、故郷の清水市に帰ってきた。家も焼夷弾や艦砲射撃にあい、バラック建てに住んでいたが、とにかく生命あることの無事を父母と喜び合い、ドラム缶のお風呂に入り、心尽くしのうどんを食べた。新しい生活の出発である。

その後、土地を借りて家を建て、母もいろいろと商売し、私も清水市役所に勤め、伸明の成長を楽しみに夫の遺書を見て励ましあった。伸明も高校大学と進学し、やがて就職して沼津に転居してきた。結婚もし、孫も生まれて私も初めて生き甲斐を感じるようになった。

舅は昭和 27 年、病気で 57 歳で他界。姑も九年間床につき、昭和 58 年、85 五歳の長寿を全うしたが、一人息子の戦死後、長い間共に働き、悲しみを分かち合ってここまで来られたのは、姑のお陰と感謝している。

昭和 56 年 9 月 1 日、私も 33 年勤めた市役所を定年退職し、主人との短い縁ではあったが、主人のお陰で今は息子夫婦と三人の孫にも囲まれ、戦中・戦後、想像もしなかった平和の中で幸せな生活を送っている。

平成 7 年 8 月、夫の戦死地マニラへ一度行ってみたいと思ったが、治安が良くないのでインドネシアバリ島に息子に連れて行ってもらった。南洋の青い海岸、きらきらと照り付ける太陽、岸壁にたたずみ、私は戒名と花束を海に投げ入れ、それが行きつ戻りつしていたが、やがて沖へ沖へと流れて行った。やがてマニラ湾へ続くことを祈りつつ…。

戦後 65 年、すべての事が昨日のように思い出される。苦しかった歳月。1 年にも満たない夫との新婚生活、父を知らない子を必死に育てた歳月、すべては夢と思えるようになってしまった。

「戦争」の二文字に運命を翻弄された私達、戦争で亡くなった 250 万人、空襲で生命を絶ちきられた 50 万の人達、軍人たちの尊い犠牲の上にもたらされた今の豊かな平和、戦争・空襲で亡くなったのは、私達の親・兄弟・夫・子供であると思う時、二度と私達のような辛い体験をする人がないように、平和な世の中を切に祈っている毎日である。

（平成 23 年沼津市遺族会発行「戦争と平和」より）